



鹿児島にて

小松 守

(秋田市大森山動物園 園長)

先日、南国鹿児島で全国の動物園長、水族館長が集まる会議が開かれた。約150人が集まり、経営のことなど様々な情報交換等が行われた。総裁・秋篠宮文仁親王殿下もご臨席になり、研究発表などに熱心に耳を傾けられた。平成21年に秋田でも行われたことがあったが、今回の会議後の情報交換会で殿下は以前の秋田会議を思い出されたのか、私のところにもおいで下さり、「最近の大森山動物園のイヌワシ飼育状況はいかがですか」とお言葉をかけてくださった。きめ細やかなお言葉が身にしみた。

会議参加には土地、土地の風土にふれる楽しみもある。十数年ぶりに訪れた鹿児島の印象を少しばかりお伝えしたい。

空路入った鹿児島空港は、アジアに開かれた海外路線も増え南の玄関口としても賑わっていた。空港からJR鹿児島中央駅に移動すると九州新幹線開通や今年のNHK大河ドラマ「西郷どん」の効果もあり、こちらも大賑わいであった。商業施設やバスセンターもリニューアルされ、九州観光の南ターミナルとして地位を高めていた印象だ。

鹿児島市の繁華街として賑わう天文館界隈のことを街の人に聞いてみた。「昔はもっとズンバイ（たくさん）人がいたもんだ」と意外な返事だった。夜の観光スポットには変わりはないが、空き地の駐車場化にどことなく時代の変化が見えるようだった。

鹿児島と言えば誰しも桜島を思い浮かべるだろうが、最近は霧島連山の新燃岳も噴火するなど、火山と関わりが深い。県の地理的な形は、指宿や開聞岳などがある西の薩摩半島、日向灘に連続する東の大隅半島で構成され、両半島の間にある鹿児島湾（別名を錦江湾）はまさに巨大な噴火口だ。鹿児島市は噴火口外輪に位置し、桜島は火口の中心部にあたるのだろうか。

両半島が乗る地殻は東西に引っ張られているらしく、桜島、新燃岳の噴火活動はその地殻の動きが影響しているのだろうか。南の海に連なる種子島、屋久島などの島嶼群は過去の地殻変動の名残りなのであろう。

鹿児島の人々の営みは、火山とともにあり、それとの長い付き合いの中、火山活動を極端に憎んだり、嘆いたり、拒絶するのではなく、さらりと関わり、逆に火山活動の結果できた自然環境を実にうまく利用しているように思えた。

天気予報の噴火情報はあっさりしていた。「今日の桜島噴火情報、南南西の風のため〇〇地区での降灰が予想されます。大きな噴火の場合、噴石にもお気を付けください…」、にわか雨予報程度に聞こえてきた。

火山灰で形成された水はけのよいシラス台地を巧みに活かした農業は実に盛んだ。サツマイモ生産は断トツの全国1位だし、お茶は静岡と争う生産量で全国2位を誇る。あの悲しい特攻隊基地があった知覧には見事な茶畑が広がる。

畜産物生産も高く、豚や肉牛の生産なども含め鹿児島県の農業総生産額は全国トップレベルだ。鹿児島は実に豊かな農業県だと感じた。

火山が生んだシラス土壌と温暖な気候を実に上手く有効に活かしているが、特産のサツマイモは芋焼酎の重要な原材料でもある。帰り際の空港ラウンジで最高級芋焼酎が惜しげもなく無料提供されていて、酒好きにはたまらないサービスだった。鹿児島の好感度がさらに高まったことは無論だ。観光戦略として酒の国秋田も参考にしてみたい。

鹿児島の人たちは、こうした火山のある自然や地形や気候、生態系の中で生き続け、特有の歴史、経済、文化を育みながら生きてきたのであろう。日本の南端にあり、昔から海外との窓口にもなりながら、時代と共に様々な感覚を身につけ蓄積してきたに違いない。それは日本の新たな時代づくりの際に発揮されたりもした。西郷隆盛などの人物はこうした風土の中で生まれ、育まれたのだらう。動物の生き方が自然の中でつくられるように、人も自然の中で生かされ、育まれているのだらうと妙な感傷に浸ってしまう。

鹿児島での動物園人としての発見もあった。錦江湾を望む高台につくられた市営平川動物公園を訪問した時、入園してすぐにキリンやダチョウが生活する展示ゾーンが目に入ったが、そのはるか向こうに噴煙を上げる桜島が借景として活かされていた。アフリカ・サバンナで遠景にキリマンジャロを眺めながら動物を見ているかのような感覚だった。鹿児島のシンボル、桜島を最大限に活かした展示を売りにするあたり、「にくいね！」と言いたくなった。

鹿児島市の水族館でも同じように、土地の自然を有効に活かしていることが分かった。火山

がつくった錦江湾の水族を「かごしまの海」をテーマに、特有の海洋生物を様々な切り口で展示していたのだ。

暮らし、経済、観光にと、鹿児島の人たちは自分たちが生きる自然を最大限に有効に活かしているのがわかる。しかし、それは土地、土地で生きる上で、むしろ当たり前の事なのかもしれない。自分たちが生きる自然と上手に付き合えず、好きになれなかつたり、有効に活かすことができないのであれば、生きる効率性が上がらないだろうし、それは生きていく上でもつまらないことだろう。自然とうまく付き合い、その自然を活かすことの巧みさを鹿児島の旅から学んだような気がした。

鹿児島会議では地域特性と経営、展示がちょっとした議論になった。かごしま水族館が「かごしまの海」をテーマに展示するように、水族館は各地の海に生息する水族を採捕し展示することで地域特性が打ち出しやすいが、動物園は世界の動物が対象で地域性は出しづらいよねと。キリン、ライオンなど地球の裏側の動物がどうしてもメイン展示になり、ある種のグローバルな感覚だ。日本産動物は目立たず小さく色気も少ないシャイなものが多く、研究展示は別にして主人公にはなりにくいなども課題だ。

鹿児島では動物園も水族館も火山をうまく活かしていたが、秋田の動物園として何を地域特性に出せるのか実に悩ましい。山々に囲まれた悠々たる田園風景に生きる秋田、そこに生きること、ある種の柔らかさ、やさしさが特徴とするならば、やさしい雰囲気のある秋田を活かし、やさしく生き物と対話できる「動物と語らう森」の動物園を特徴づけられないだろうか。動物園に活かせる秋田の特性を改めて考えてみたい。